

## 自由48

照葉樹林における種子散布者としてのサルの

役割

高槻成紀(東京大・院・農学生命), 蒲谷肇(東京大・秩父演習林)

房総半島のサルが種子散布者としてどのような役割を果たしているかを明らかにするための基礎調査として、1) 植物のフェノロジーの記録、2) 主要果実の種子標本ライブラリーの作成、3) サルの糞採集、を行なった。タブノキ、ヤブツバキ、マテバジイ、トベラ、マメガキ、イヌビワ、アオツツラフジなど、暖地および海岸に特徴的な種がサルにどのように利用されるかが注目される。

ベリーには初夏結実(ヒメコウゾ、ヤマグワ、ハナイカダなど)、秋結実(イヌビワ、ガマズミ、シロダモ、ノブドウ、ムラサキシキブなど)、冬結実(フユイチゴ、キツタ、ヒサカキ、モチノキなど)の3タイプが認められた。このうち、秋結実型と冬結実型には、初夏から未熟状態で持続する種群と、比較的短期に熟す種群とが認められた。

ナッツにはコナラ、マテバジイ、イヌガヤなどがあり、いずれも秋に結実した。これらの果実・種子を採集し、乾燥標本あるいは液浸標本として保存している。種子についてはサイズ、形態、色などによる検索システム確立を目指している。また、果実や葉の表皮細胞のプレパラートを作成して糞分析のためのレファレンスとする予定である。

サルの糞(n=100)は液浸標本として保存しており、顕微鏡でポイント検法によって分析する予定である。

## 自由49

ニホンザル、アカンボウ〜コドモ期における社会化過程の研究

亀井伸孝(京大・理・動物)

ニホンザルは社会的生活を送る中で、他個体との間に様々なルールを成立させている。中でも、極めて顕著かつ再現的に表面化することから、ニホンザル研究における基本的な概念として採用されるに至ったのがいわゆる"優劣関係"である。筆者は、この"優劣関係"を含む諸ルールがいかなるインタラクションの過程において成立し、維持されるのか、を知ることを目的に、宮崎県幸島においてアカンボウ〜オトナ期のニホンザル個体を対象に野外観察を行った。詳細は分析中のため別に譲るが、特に顕著な事柄について記す。一般に、二頭による食物をめぐる葛藤の場面において、①大方の現象の推移においては"優劣"を仮構でき、またその再現性を見ることができた("優劣関係"設定の、現象面における妥当性の確認)②しかし実際の食物入手過程においては、相手の視線/位置などの諸条件が現実を規定する力として作用する局面がしばしば見られた("優劣関係"に回収されきれぬ部分の持つ影響力)。これは、ひとえに"優劣関係"概念の限界として、ではなく、従来「"優劣関係"の顕現」として説明されてきた現象を実際に現場において構成する、諸々の<実践的な力の作用>について考察してゆくための糸口として、捉えるべきであろう。動的な諸作用の中に静的(に見える)構造が析出してくる過程(=社会化)の研究においては、このようにその過程を<実践的な作用>の動態とその<身体への内面化>として捉える視点が有効であると思われる。